

〔論文〕

## 外国人からみた明治時代の名古屋

吉 田 達 矢

名古屋学院大学国際文化学部

### 要 旨

本稿では、明治時代（1868～1912年）に名古屋を訪れた外国人19人の日記・旅行記などの史料から、彼らが当時の名古屋をどのように見ていたのか、どのように滞在し、名古屋の何に注目したのか、などの問題について考察した。まず滞在日数に関しては、個々人によって異なり、特定の傾向は見出せなかった。宿泊場所は、秋琴楼・支那忠・名古屋ホテルがよく利用された。訪問場所としては、名古屋城を見学したあるいは何らかの言及をしたのは19人中14人であったことから、明治時代の名古屋では名古屋城が外国人にとって一番の観光場所であったと推測される。名古屋の特産品として認識されていたのは、陶磁器（七宝焼）や扇（子）などであった。名古屋に対するイメージとしては、明治半ばころから「近代的な産業・工業都市」として徐々に認識されるようになり、名古屋の人たちに対する印象は概ね好意的であったといえる。

キーワード：名古屋，明治時代，外国人，名古屋城，陶磁器

## Nagoya in the Meiji Era from foreign visitors' perspectives

Tatsuya YOSHIDA

Faculty of Intercultural Studies  
Nagoya Gakuin University

---

\* 本研究は名古屋学院大学研究助成（共同課題研究：「宗教と民族の対立・交流の現代歴史学的研究」）を受けたものである。

発行日 2019年7月31日

## はじめに

現在の名古屋市は「観光文化交流局観光交流部国際交流課」のなかに「推進係」を設置し、「国際都市」として発展しようとしている<sup>1)</sup>。つまり、名古屋市はこれまでの「商工業都市」<sup>2)</sup>あるいは「産業都市」から大きく変わろうとしており、名古屋市にとって現在は「変化の時代」といえるだろう。それでは、現在と同じように大きな変化があった時代、すなわち、近世から近代への過渡期にあたる明治時代（1868～1912年）には、名古屋にはどのような変化があったのだろうか。名古屋市史の概説書では、名古屋の産業にとっての明治20年代～40年代というのは、新たな近代的な産業が誕生し勃興していったと同時に、江戸時代からの産業や伝統も残っていた時代、と位置づけられている（新修名古屋市史編集委員会2000：431-432, 440）が、このようなことは当時の名古屋の社会面などにも当てはまるのだろうか。

以上を踏まえ、本論では、明治時代に名古屋を訪れた外国人による日記・旅行記などの史料の検討から、彼らの眼を通して見た当時の名古屋はどのような都市であったのか、彼らはどのように滞在し、名古屋の何を見たのか、などの問題を考察する。あわせて、当時の名古屋の人たちが外国人に対して名古屋をどのように見せようとしたのか、という問題についても検討する。これらの考察は、今後の名古屋の方向性や観光業発展のためにも有益だと思われる。

なお、名古屋の行政上の位置づけや市域は時代によって変化したので<sup>3)</sup>、以下では名古屋で統一し、その範囲は現在の名古屋市の市域とする。また、引用箇所〔 〕は筆者による補足である。旧字体は固有名詞を除いてできるだけ現代の書体に変えた。

## 1. 明治期の外国人旅行制度と名古屋

### 1.1 外国人旅行制度

江戸時代末期に横浜など複数の港町が開港したが、幕末から明治初めにおける情勢不安が安定するようになって、明治政府は国内自由旅行制限の全面撤廃はなかなか実行しなかった。明治政府は、明治7年（1874）に「外国人内地旅行允準条例」を定め、学術研究と病氣養生の場合に限り「旅行免状」を発給して、外国人の国内旅行を許可した。これにより学術のためと称する外国人が日本各地へ出かけられるようになった（内田2018：60）。ただし、明治12年（1879）12月18日に多治見を訪れたサトウは、「（主人の留守中）宿に落ち着いたのだが、その後彼〔＝宿の主人〕がやってきて言うには、外国人がきたことをあらかじめ警察に通知してからでないと泊めてはいけなと、警察から沙汰を受けているのだそうだ。しばらくして警察が私を尋問にやってきたが、そのような決まりはないと否定した。しかし宿の人の言ったことのほうが本当のような気がする」（サトウ1992：242）と記している。また、明治26年（1893）年10月下旬に来名したコジェンスキーも、「…大津に一晩泊まりたかったが、そこは私たちの書類に記載されていなかった。記載のない町には宿泊できないのである。それで大津からはほど遠からぬ京都に直行しなければならなかった。特別の許可がなくても大津への旅は可能だが、宿泊できないので同日中に京都に戻らなければならない」（コジェンスキー2001：257-258）と

述べている。これらの記述から、明治20年代までは、外国人は自由には日本国内を旅行できなかった、少なくとも宿泊場所は事前に申請しておく必要があったようである。そして、明治32年(1899)になってようやく、外国人は日本国内を自由に旅行できるようになった。

## 1.2 旅行者にとっての明治時代の名古屋

江戸時代の東海道の宿場町は、宮(熱田)宿の次は渡し船に乗り伊勢湾を渡って桑名宿であったので、外国人だけでなく日本人旅行者にとっても、名古屋は訪れにくい場所であったと思われる。たとえば、サトウは慶応3年(1867)5月23日に桑名から宮(熱田)へ渡った後、名古屋には行かず鳴海に向かった(萩原1999:63)。また、明治10年(1877)7月中旬に桑名から宮(熱田)に到達したオーストリア人地理学者のクライトナー(1847~1893)も、名古屋を大都市として認識していたにもかかわらず、名古屋には立ち寄らずに岡崎に赴いている(クライトナー1992:264-265)。明治14年(1881)年9月に来名したコトーも、「名古屋は京都への道の途中ではないので、我々は宮へ引き返しそこから船に乗らなければならない。つまり東海道は宮でいったん中断され、〔伊勢〕湾の対岸でまた始まるわけだ」と記している。また、明治20年(1887)8月上旬に来名したモールも、「現代の旅行者は横浜から神戸まで汽船に乗り、神戸から京都までは鉄道を利用した」(モール2011:140-141)と述べており、海路を使って旅行する場合にも名古屋は素通りされることが多かったと推測される。

このような名古屋の位置づけは、明治22年(1889)7月11日に東海道線(新橋~神戸間)が全線開通(新修名古屋市史編集委員会2000:526)しても、あまり変わらなかったようである。実際、明治20年代前半に名古屋を訪れたと推測されるシドモアは、「名古屋は旅行コースからやや外れているため…」と記している(シドモア2002:267)。また、オーストリア人美術史家のフィッシャー(1856~1914)は、1890年代末に熱田を見学した後は名古屋には行かず、四日市に渡っている(フィッシャー2001:133-137)。明治42年(1909)に来日した、ロシア帝国領内の西シベリア出身のムスリム(イスラーム教徒)であったアブデュルレシト・イブラヒム(1857~1944)も、米原から横浜行きの列車に乗ったが、途中下車はしなかったようである(アブデュルレシト・イブラヒム2013:53-54)。

これらのことから、明治時代の名古屋は、東京や横浜や京都と異なり、外国人がほぼ必ず訪れるような都市ではなかったといえる。しかし、それでも名古屋を訪れた外国人は沢山いた<sup>4)</sup>。

次章では、実際に名古屋を訪れた外国人に関する諸史料を検討し、来名した彼らの滞在状況に関して検討する。

## 2. 名古屋を訪れた外国人

表1は、自身が記した記録(日記・旅行記など)やある程度の分量がある訪問記録などから、明治時代に来名した外国人たちの出身国やプロフィール、名古屋滞在日数や宿泊場所を一覧にしたものである。勿論、上述のように明治時代に名古屋を訪れた外国人の数は表1の数よりも遥かに多く、その内のわずか19人の記録であることは考慮する必要があるが、それでも幾つかの考察を試みてみたい。

表1：明治時代に名古屋を訪問した主な外国人

名前 (生没年)	出身国	職業・階層・身分	名古屋訪問・ 滞在年月日	宿泊場所
①フェルディナンド・ フォン・リヒトホー フェン (1833～1905)	ドイツ	男爵, 地質学者, 地 理学者	明治3年(1870) 11月15日	
②ウィリアム・エリ オット・グリフィス (1843～1928)	アメリカ	理科教師, 牧師, 著 述家, 日本学者, 東 洋学者	明治5年(1872) 1月27日	
③アーネスト・メイス ン・サトウ (1843～1929)	イギリス	通訳生, 日本語書記 官	明治12年(1879) 12月17～18日	町で一番の銭屋
④エドモン・コトー (1833～1896)	フランス	ジャーナリスト・旅 行家	明治14年(1881) 9月20～22日	オテル・デュ・プロ グレ
⑤ニコライ (1836～1912)	ロシア	ロシア正教会宣教 師, 日本ハリストス 正教会の創健者	明治15年(1882) 6月6日(18日), 明治22年(1889) 10月14～17日	祈禱所がある住まい
⑥エドワード・シル ヴェスター・モース (1838～1925)	アメリカ	動物学者	明治15年(1882) 7月末～8月初め の間の数日?	不明
⑦ウーグ・クラフト (1853～1935)	フランス	シャンパン財閥の御 曹司	明治15年(1882) 9月4～5日	不明
⑧オットマール・フォ ン・モール (1846～1922)	ドイツ	貴族, 外交官	明治20年(1887) 8月上旬の数日?	不明
⑨チャールズ・ホーム (1848～1923)	イギリス	美術家	明治22年(1889) 4月10～12日	支那忠ホテル
⑩エリザ・ルーアマー・ シドモア(女性) (1856～1928)	アメリカ	紀行作家, 人文地理 学者	明治22～23年(1889 ～90)の間のどこか 数日 <sup>*1</sup>	シュロキンドウ(秋 琴楼?) <sup>*2</sup>
⑪サー・エドウィン・ アーノルド (1832～1904)	イギリス	ジャーナリスト, 詩 人	明治23年(1890) 3月29日～4月2日 のどこか1日?	
⑫ウォルター・ウェス トン(1861～1940)	イギリス	宣教師, 登山家	明治24年(1891) 2月初め, 明治26年(1893) 5月頃?	不明

外国人からみた明治時代の名古屋

⑬ フランツ・フェル ディナント (1863～1914)	オーストリア	オーストリア・ハン ガリー帝国皇太子	明治26年(1893) 8月14～15日	秋琴楼
⑭ ヨゼフ・コジェンス キー(1847～1938)	ボヘミア	旅行愛好家, 教師(ボ ヘミアの教育総監)	明治26年(1893) 10月21日から1泊以 上	シナチュウ(支那忠 ホテル, 進歩ホテル)
⑮ メアリー・フェノロ サ(女性) (1865～1954)	アメリカ	東洋美術史家アーネ スト・F・フェロノ サの妻	明治29年(1896) 8月5日	
⑯ アンドレ・ベルソー ル(1866～1942)	フランス	小説家, 翻訳家, 旅 行作家, 評論家	明治30年(1897) 5月3日から数日?	進歩ホテルに宿泊?
⑰ エセル・ハワード(女 性)(1865～1931)	イギリス	明治34年(1901) から7年間, 島津忠 義公爵の子息5人の 養育係	明治34年(1901) 春に1泊2日	不明
⑱ A.B. ミットフォード (1837～1916)	イギリス	貴族, 国王の弟コン ノート公の第一王子 コンノート公アー サーを名代とする使 節団の首席随員	明治39年(1906) 3月12～13日	名古屋ホテル
⑲ ウィリアム・ブース (1829～1912)	イギリス	救世軍 <sup>※3</sup> 創業者	明治40年(1907) 5月 <sup>※4</sup> 1泊2日	名古屋ホテル

※1: シドモアの来名の日付はシドモア2002では記されていない。中野は彼女が明治18～23年(1885～90)の間  
に東海道を旅行したと述べている(中野2013:102)。しかし, シドモア2002の中には, 「のんびり走っていた  
名古屋発, 琵琶湖・長浜行き列車が次第に目の眩むようなスピードを出して抜き去りました」(シドモア2002:  
275)という記述があり, 東海道線が明治22年(1889)7月11日に全線開通(新修名古屋市史編集委員会2000:  
526)したことを考慮すると, シドモアの来名は明治22～23年(1889～90)のあいだと推定される。

※2: シドモア2002:259では, シュロキンドウの説明として, 「城金堂? 名古屋で唯一の洋式ホテル・支那忠(中区  
栄町・広小路通)のことか?」と記されているが, 音から判断すると, 「秋琴楼(シウキンロウ)」だと思われる。

※3: ウィリアム・ブースによって1865年に設立されたキリスト教(プロテスタント)の団体。2018年8月時点で,  
イギリスに本部があり, 131の国と地域で活動している。(救世軍の日本法人公式ウェブサイト:<http://www.salvationarmy.or.jp/>) (最終アクセス: 2019年4月16日)

※4: 山本1907:157では5月3日に来名となっているが, 名古屋市会事務局(編)1961:353では5月31日となっている。

## 2.1 滞在日数

表1をまとめると, 1日:4人(番号①・②・⑪・⑮), 1泊:6人(番号③・⑦・⑬・⑰～⑲), 2泊:  
2人(番号④・⑨), 数日:6人(番号⑤・⑥・⑧・⑩・⑭・⑯), 不明:1人(番号⑫)となる。

各分類の数値に極端な偏りはなく, 来名の年代も有意な傾向は見出せない。このことから, 外国人  
にとっての明治時代の名古屋というのは, 「1泊でも十分であると当時に, 観光のために数日滞在す  
ることもできる都市」であったといえる。

## 2.2 宿泊場所

表1のうち、少なくとも15人が名古屋に宿泊している。その内訳は、銭屋：1人（番号③）、祈祷所がある住まい：1人（番号⑤）、支那忠（オテル・デュ・プログレ、進歩ホテル）<sup>5)</sup>：4人（番号④・⑨・⑭・⑯）、秋琴楼：2人（番号⑩・⑬）、名古屋ホテル：2人（番号⑱・⑲）、不明：5人（番号⑥～⑧・⑫・⑰）であった。

「銭屋」と「祈祷所がある住まい」については特定が難しい。一方、秋琴楼は、明治26年（1893）に出版された『尾張名所獨案内』によると、「…広小路にありて構造極めて精巧を込めたる旅舎にして傍ら料理を兼ね貴賓の旅宿及び宴会場に充り」と記されている（浅井1893：14）<sup>6)</sup>。支那忠については、上記の『尾張名所獨案内』では、「…富澤町にある旅舎にして当市に於て西洋料理を始めた祖なり貴顕紳士及び西洋人は多く此家に宿す」と説明されている（浅井1893：13）<sup>7)</sup>。名古屋ホテルは、『旅館要録：四四年後期 増補改訂七版』（以下、『旅館要録』）において、「内外皇族その他貴紳の投宿せらる東海道中大旅館にして…」（東京人事興信所調査1911：28）と記されているように、表1で挙げた者たち以外にも国内外の貴賓が宿泊した<sup>8)</sup>。

以上のことから、不明な点が多いものの、外国人が利用した主な宿泊場所としては、明治前半では秋琴楼と支那忠、名古屋ホテルが開業<sup>9)</sup>して以降は名古屋ホテルと支那忠であったと推測される。実際、『ジャパン・ディレクトリー』では、明治34年（1901）以降は名古屋のホテルとして名古屋ホテルか支那忠しか記されていない（立脇1997）。また、『旅館要録』においても、「Hotels Recommended [recommendedか? ]」として、名古屋については「Nagoya Hotel [名古屋ホテル]」と「Shinachu-shiten [支那忠支店]」しか挙がっていない（東京人事興信所調査1911：[1]）。

なお、『明治日本旅行案内』<sup>10)</sup>では、旅宿として、丸屋、銭屋、大宮の名を挙げている（サトウ1996：140）。しかし、上記の結果からは、これらは外国人にはあまり利用されなかったことになる。

## 3. 外国人訪問者たちは名古屋の何に注目したのか

### 3.1 訪問場所

表2は、名古屋を訪れて記録を残した者たちが、名古屋のどこを訪問したのか、何について言及したのかなどをまとめたものである。各人の来名目的<sup>11)</sup>などが異なっていたことは配慮しつつ、以下では各項目に関して若干の考察を試みる。

表2：来名した外国人たちが見学・訪問や言及した事柄

名前	名古屋城	寺院・神社	陶磁器（七宝）	その他
①リヒトホーフェン				商家で昼食
②グリフィス	言及のみ		言及のみ	
③サトウ		東照宮、建中寺		永楽屋（出版元） 名所巡り

外国人からみた明治時代の名古屋

④コトー	見学	熱田神宮神社仏閣を十二ほど（東本願寺）	言及のみ	街中を散策
⑤ニコライ				本屋 徹夜禱 信徒との懇親会
⑥モース	見学			
⑦クラフト	見学		仕事場を見学	
⑧モール	見学			市中見物
⑨ホーム	見学		七宝職人の仕事場	展覧会
⑩シドモア	見学		言及	名古屋祭(東照宮祭)
⑪アーノルド				軍事演習
⑫ウェストン	見学	熱田神宮について言及	言及	濃尾地震被害の調査
⑬フランツ・フェルディナント	見学			
⑭コジェンスキー	言及のみ？	五百人の弟子〔五百羅漢〕の寺	職人の仕事場	
⑮フェノロサ	見学			
⑯ベルソール	言及のみ？	本願寺		路地
⑰ハワード	見学			
⑱ミットフォード	見学		言及	御園座
⑲ブース				新守座における大集会での演説 新聞記者との会見

A：名古屋城（名古屋離宮）<sup>12)</sup>（以下、名古屋城）

表2をまとめると、実際に見学11人（番号④・⑥～⑩・⑫・⑬・⑮・⑰・⑱）、おそらく言及のみ3人（番号②・⑭・⑯）、全く言及なし5人（番号①・③・⑤・⑪・⑲）であった。来名した全員が名古屋城を見学あるいは言及しているわけではないが、上記の数値から、名古屋城は明治時代の名古屋にあって一番の「観光場所」であったとはいえそうである<sup>13)</sup>。

ただし、名古屋城は自由には見学できなかった。たとえば、コトーは県庁に赴き、名古屋城の見物の許可を申請している（コトー1992：178）。モールも「軍当局の特別の許可がなければ上れなかった天守閣の中…」と記している（モール2011：138）また、『明治日本旅行案内』には、「〔名古屋城の〕外郭地には何棟もの兵舎と練兵場が並びその周辺を一般民衆も自由に通行することができるが、日本における典型的な城郭を訪れるには指揮官の特別許可を得る必要がある」（サトウ1996：140）と書かれている。オットマ<sup>14)</sup>も「城内に入るには、〔徳川家の〕御子孫の方から許可を得なければならない」と述べている（オウタマ僧正1974：61）。



なお、ベルソールは、「名古屋城はまだ崩れずに立っているが、もはや石の残骸でしかない」（ベルソール1989:23）と述べており、名古屋城を過去の遺物として、全く興味を示さなかったようである。また、コトーは、「日本の藩主の居城は多くの場合行政庁に転用されているが、残念ながらここ〔名古屋城〕でも美術品の管理は忘れられ、遠からず滅失する運命にある」（コトー1992:179）と述べ、杜撰な管理体制を批判している。モールも、「残念なことに〔城内の〕これらの美しい部屋に駐屯した陸軍の事務局はこうした美術品に敬意を払わず、あちこちにインクのしみをつけたり、壁にくぎを打ちこむなど、一言でいうと全く野蛮な使い方をした」（モール2011:138）と述べ、軍の管理に不平を述べている。

#### B：寺院・神社

寺院・神社に関して、実際に訪問あるいは何らかの言及をしているのは5人（番号③・④・⑫・⑭・⑯）だけであった。それらについて最も言及しているのはサトウである。『明治日本旅行案内』では、那古野神社、名古屋東照宮、東本願寺、栄国寺、七面社〔七面山妙善寺〕、西本願寺、七寺（長福寺）、真福寺〔大須観音〕、万松寺、大光院、若八幡〔若宮八幡社〕、建中寺を紹介している（サトウ1996:141-144）。また、ベルソールは「…寺院は、この工業都市にあって、最も生き生きしているものでさえある」（ベルソール1989:23）と絶賛している。

熱田神宮に関しては、名古屋の中心部からやや外れているためか、訪問や言及している者は少ない（番号④・⑫）。熱田について最も詳しく述べているのは、上述のフィッシャーであった（フィッシャー2001:133-137）

#### C：陶磁器関連

陶磁器に関して、何らかの言及や職人の仕事場を見学したのは8人（番号②・④・⑦・⑨・⑩・⑫・⑭・⑱）であった。このほか、陶磁器に関連する言及として、たとえば、「名古屋は扇、陶器、七宝焼<sup>15)</sup>で有名である」（グリフィス1984:256）、「名古屋には七宝が盛んで…」（クラフト1998:26）、「名古屋は「七宝」で有名だ」（ホーム2011:63）、「この七宝焼で、名古屋は世界的に有名になった」（コジェンスキー2011:249）、「七宝で名高い」（ミッドフォード1986:163）、「当地〔名古屋〕の主な生産品は扇子と瑠瑯<sup>16)</sup>である。瑠瑯産業は飛躍的に発展し、本町十丁目にある七宝会社では美しい芸術品が製造されている」（サトウ1996:140）、「名古屋は焼き物産業の中心であり…」（Times1910:1）<sup>17)</sup>、「最大の産物は陶磁器、扇子などである」（オウタマ1974:61）などと記されている。また、明治26年（1893）11～12月のあいだに来名したイタリア人ジョヴァンニ・デ・リセイ（1872～1950）も、名古屋を「陶器生産の中心地」と述べている（上野2015:59）。ウェストンも、「…この地方を昔からずっと引続いて有名にしているもので、その価値があると思われるものは、名古屋城でも金の鯨でもない。〔名古屋〕市の北東へ十二マイル離れた辺りで、…瀬戸の町がある。日本語で陶磁器のことを、この町の名前をとって瀬戸物というが、それはちょうど我々が英語で同じ品物のことを、チャイナというが如きものである…」（ウェストン1987:142-143）と記し、間接的ながら名古屋の特産品として「陶磁器（瀬戸物）」を挙げている。

このように、来名した多くの外国人たちは、名古屋の特産品を陶磁器と認識していた。ホームとコジェンスキーは実際に職人のもとを訪れている（ホーム2011:63；コジェンスキー2001:250-251、



254-255)。一方で、シドモアは「瀬戸物」について詳細に述べているものの、「名古屋や瀬戸は粗悪な装飾の磁器茶壺によって豊かになり幸せになりました。つまり、芸術が消えるということは、産業が潤うということです！」(シドモア2002:266)として、低品質を指摘している。実際、明治20年代は粗製濫造が深刻な問題であった(新修名古屋市史編集委員会2000:474)。また、「日本では七宝は過去三、四十年の間に大きく変わった。一八六五年から七〇年にかけて、その模様は主として中国風であった。現在、名古屋で作られている花瓶は全くヨーロッパ風のもので、あやめ、百合、菊、その他の花の非常に写実的な模様が描かれていた」(ミットフォード1986:164)と述べられているように、明治20～30年代は陶磁器生産にとって過渡期や変革期であった。

#### D:その他

名古屋の中心部については、「メインストリートはほとんど商店だけで占められており、荷馬の数が多いことは活発な商業活動を示している」(リヒトホーフエン2013:174)、「街路はこの上なく整然として、互いに直交し、大通りも大変な賑わいだ」(コトー1992:176)、「役所の建物はすべてヨーロッパ式で、木の柵と花壇に囲まれている」(クラフト1998:25)、「〔名古屋〕駅を出て、しだれ柳並木の大通りに立つと、この町が驚くほど近代的な都市に思われた」(ベルソール1989:18)、「名古屋の主な洋館は最高裁判所、中学校、尋常小学校、女学校で、いずれも城の南部の通りを隔ててすぐのところにある。また市街地の真中を突っきる広い通りの東にある県庁、同じ通りの中程にある電信局、郵便局、それに川の近くにある病院も西洋建築である」(サトウ1996:144)などと述べられている。つまり、名古屋の中心部は、大変に活気があり、次第に西洋風の街並みに変容していったことがうかがえる。

一方、市中(路地)を見学したのは3人(番号④・⑧・⑩)だけである。大通りをひとつはいると、「名古屋には東京の浅草とよく似た街区があり…」(コトー1992:177)、「柳並木の大通りから外れ、曲りくねった小路に一步入りこんだ途端に、ヨーロッパ文明は跡かたもなく消え失せる」(ベルソール1989:19)などと記されており、大通りや中心部以外では、江戸時代の「面影」が色濃く残っていたようである。

なお、ブースが演説を行った新守座は明治6年(1873)7月に建てられ、明治初期の芝居小屋の中心のひとつであったが、ミットフォードが観劇した御園座の開業(明治29年(1896))以降は小芝居小屋となっていた(新修名古屋市史編集委員会2000:847-848)。

### 3.2 陶磁器以外の特産品・名物

陶磁器以外の特産品については、「名古屋は扇、陶器、七宝焼で有名である」(グリフィス1984:256)、「当地〔名古屋〕の主な生産品は扇子と瑠璃である」(サトウ1996:140)、「最大の産物は陶磁器、扇子などである」(オウタマ1974:61)などのように記されていることから、扇あるいは扇子も名古屋の特産品のひとつとして認識されていたようである。

また、「…アジア市場向けの莫大な量が生産される時計の製造において、〔大日本〕帝国の主要な都市でもある」(Times1910:1)という記述もみられた。実際、時計は、明治30～40年代では、名古屋の成長する機械器具工業を代表する製品のひとつであった(新修名古屋市史編集委員会2000:

439)。なお、繊維工業は明治中期には名古屋最大の産業になった（新修名古屋市史編集委員会2000：435）が、綿糸や織物に注目している者はごく僅かであり、彼らが言及しているのは絹に関連する事柄であった<sup>18)</sup>。

上記のほかにも、名古屋の名物として、「名古屋の舞妓と芸妓は、断トツの優美、気品、センスで日本中に知れ渡り、芸妓の宴は名古屋城の金鯰と同様、名古屋の宝です」（シドモア2002：271）や、「名古屋はまた踊り（dance）で有名であり…」（Times1910：1）などとも記されている。また、サトウは、本屋が多く、出版が盛んともしている（サトウ1992：241；サトウ1996：140-141）。

### 3.3 名古屋のイメージ

外国人たちが名古屋をどのような都市とみなしていたのかという点については、「商業が盛んなようだ」（リヒトホーフエン2013：174）、「名古屋という大都市」（クライトナー1992：264）、「…日本で四番目に大きい都市」（グリフィス1984：256）、「日本で第四位の人口を有するこの大都市」（コトー1992：177）、「人口三十万人の栄えた工業都市」（クラフト1998：25）、「尾張地方の大都会名古屋」（モール2011：136）、「商業都市・名古屋」（シドモア2002：265）、「日本で三番目に大きい都市で、京都より大規模」（ホーム2011：63）、「…名古屋は近代化された日本の都市の中でも最も繁栄し最も進歩した都市の一つ」（ウェストン1987：141）、「繁栄している地方都市」・「日本第四の都市」（フランツ・フェルディナント2005：152）、「大都市の交通量と騒音を、[名古屋の]どの通りでも観察することができた。東京に戻ったのかと思ったほどである。名古屋は日本第四番目<sup>19)</sup>の都市で、ほぼブラハと同じ大きさ…」（コジェンスキー2001：246）、「遠くから見る名古屋は、工場の煙と蒸気を噴き上げているように見えた。[名古屋] 駅を出て、しだれ柳並木の大通りに立つと、この町が驚くほど近代的な都市に思われた。二輪車、三輪車の類いもずいぶんとうるさかった」・「日清戦争以降、名古屋が大阪に次いで、日本の最大級の工業都市の一つになった」（ベルソール1989：18, 23）、「名古屋ほどよりよく変化した日本の都市はない。…名古屋は今や、40万人の人口を持つ近代的な産業都市に発展し…」・「…大阪が日本のマンチェスターならば、名古屋は日本のバーミンガムである」（Times1910：1）などと記されている。

以上の名古屋に対するイメージを、時系列を踏まえて検討すると、名古屋を「工業都市」として認識したのは、明治15年（1882）に来名したクラフトが最初である。少なくともそれ以前は、名古屋はクライトナーやグリフィスやコトーが述べているように「大都市」として認識されていても、必ずしも「産業や工業の都市」とはみなされていなかったようである。そして、名古屋を「近代的な都市」、すなわち、西洋化された都市とみなしたのは、明治26年（1893）5月ごろに来名したウェストンであり、明治30年（1897）年5月に来名したベルソールであった。これらのことから、名古屋は明治時代半ばごろから「近代的な都市」として徐々に認識されるようになっていったのではないだろうか。そして、明治時代末には、名古屋は「日本の3～4番目の規模で、過剰気味に活気がある、近代化に成功した産業や工業の都市」、というイメージが定着したといえるだろう。

### 3.4 名古屋の人たちのイメージ

名古屋の人たちに関しては、以下のような記述がみられる。たとえば、「その態度は静かで、礼儀正しかった」・「人々はとても感じがよく、上品に振る舞い、出しゃばることはなかったし、詮索するような質問をしなかったが、どの方面から見ても、同じような立場にいた中国人の仲間たちとは好対照であった」（リヒトホーフエン2013：174）、「勤勉で活動的な住民達」（コトー 1992：176）、「…感じのよい商店が数多く、住民の勤勉を雄弁に物語っている…」（フランツ・フェルディナント2005：152）、「人びとが群がっていても、それほど騒がしいことはない」（ベルソール1989：19）、「皆がとても親切で愛想がよいので、一緒にいるのが楽しかった」（ミッドフォード1986：169）、「住民の多くは多忙でもうけている」（Times1910：1）などである。

概して好意的にみられており、明治時代の名古屋の人たちは、勤勉で穏やかで礼儀正しく快活な印象を外国人たちに与えていたようである。

## 4. 日本人による英文案内書からみた名古屋

本章では、明治時代の名古屋の人たちが外国人に対して名古屋をどのようにアピールし、名古屋のどこを見せようとしていたのか、という問題について、以下の2冊の書籍を取り上げて検討する。

### 4.1 2冊の書籍

書籍①：The Nagoya Hotel (T. TAKADA) 1900, *Hand Book of Information about Nagoya and Vicinity for Tourist, the Nagoya Hotel.*

高田鐵太郎は名古屋ホテルの館主であった（東京人事興信所調査1911：28）。つまり、この書籍は名古屋ホテルに宿泊する外国人に配布するためのガイドブックであったといえる。この書籍に記されている上位10項目を挙げてみると、1「名古屋城 (Nagoya Castle)」, 2「第三師団 (司令部) (Third Army Division)」, 3「五百羅漢 (Gohyaku-rakan Buddhist 500 Diciples)」, 4「商業会議所 (Chamber of Commerce)」, 5「東本願寺 (Higashi Hongwanji)」, 6「熱田神社 (Atsuta Shrine)」, 7「博物館 (Museum)」, 8「大洲観音 (Osu Kwanon)」, 9「新地廓 (Shinchi quarter)」, 10「広小路通 (Hirokoji-dori (main street))」, であった。このうち、第三師団司令部・商工会議所・博物館は明治時代に入ってから建てられたものであり、新地廓は明治9年(1876)に誕生した遊郭であった（新修名古屋市史編集委員会2000:691）。これらのことから、書籍①では明治時代以前から存在する建造物（番号1・3・5・6・8・10）を主に挙げ、それらが来名する外国人に訪れてほしい名古屋の観光場所とみなされていたといえる。

書籍②：名古屋開府三百年記念会（編）1910、『名古屋案内』, 名古屋開府三百年記念会。

この書籍では、和文の説明の横に英語訳も記されており、外国人にも読まれることを想定して編集・出版されたと考えられる。

この書籍で記されている上位10項目を挙げてみると、1「名古屋天守台 (The Nagoya Castle)」, 2「第十回関西府県連合共進会 (The Tenth Home Competitive Exhibition)」, 3「第三師団司令部 (The

headquarter of The Nagoya Camp. (Third Army Division)」、4「愛知県庁 (The Office of the Aichi Prefecture)」、5「名古屋市役所 (The City Office)」、6「名古屋商業会議所 (The Nagoya Chamber of Commerce)」、7「日本銀行名古屋支店 (The Nagoya Branch Office of the Bank of Japan)」、8「新古美術展覧会 (The Exhibition of Art, Old and New)」、9「教育品展覧会 (The Exhibition of Education)」、10「教育博物館 (The Educational Museum)」であった。

特徴としては、明治時代に建てられた近代建造物や各展覧会を主に挙げている。つまり、書籍②では明治時代の成果や現在の状況を記すことにより、「近代都市としての名古屋」のイメージを積極的に広めようとしていたことがうかがえる。

## 4.2 両書の比較

両書で共通して上位に記されているのは、「名古屋城」、「第三師団 (司令部)」、「(名古屋) 商工会議所」のみである。一方、両書の違いに関しては、書籍①に挙げられている明治時代より前に建立された五百羅漢、東本願寺、熱田神宮、大洲観音は、書籍②ではそれぞれ、28番目、26番目、15番目、23番目に記されている。それぞれの出版年や出版意図や想定された読者層は考慮する必要があるが、書籍①よりも書籍②のほうが「近代都市としての名古屋」というイメージを積極的にアピールしようとしていたことがわかる。

## おわりに

これまで検討した結果をまとめると、明治時代に来名した外国人の傾向に関しては、個々人によって名古屋での過ごし方は異なっており、特定のパターンというは見出せなかった。たとえば、来名した外国人全員が名古屋城を見学あるいは言及したわけではなかった。

来名した外国人の多くが興味を示したのは、場所としては名古屋城、産物としては陶磁器 (七宝焼) や扇 (子) であった。つまり、彼らは、江戸時代あるいはそれ以前からの「伝統的なもの」に注目していたといえるだろう。一方で、彼らのほとんどは、名古屋の「近代化」、そしてその象徴ともいえる建築物や産業や製品 (の展示会) にはほとんど関心を示さなかったようである<sup>20)</sup>。たとえば、ベルソールは「この都市の乗り物も、市電も、欧米風の商店も、“進歩ホテル”も私を驚かすことはない」(ベルソール1989: 18) という感想を記している。唯一、明治22年 (1889) 4月に来名したホームのみが、「いたるところで「展示会」が行われているようだ」(ホーム2011: 64) と述べている。

それでも名古屋は、明治時代半ばころから徐々に「近代化した産業・工業都市」として外国人に認識されるようになっていった。さらには、第4章で明らかにしたように、とくに明治時代末の名古屋の人々は、名古屋の近代化の具体例を積極的にアピールしようとしていた。その結果、明治時代の最末期には、外国人にも名古屋の近代的 (西洋的) 側面が注目されるようになったといえる (Times1910: 1)。ただし実際には、明治時代終盤でも名古屋には「近代」と「それ以前の伝統的なもの」が混在していた。「名古屋には古いものも新しいものも、興味深いものが数多くあった」(ミットフォード1986: 169) というミットフォードの言葉がそのことをよく表しているだろう。

註

- 1) 「名古屋市公式ウェブサイト：観光文化交流局観光交流部国際交流課」(<http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/page/0000081729.html>) (最終アクセス：2019年4月16日) では、業務内容として「国際都市化の推進及び多文化共生に係る企画調整等」と記されている。
- 2) 「名古屋市公式ウェブサイト：名古屋のあゆみ」(<http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/page/0000001750.html>) (最終アクセス：2019年4月16日) では、「明治・大正から昭和の初頭には経済界の活況に伴い、商工業都市として順調な発展を続け…」とある。
- 3) 名古屋市は明治22年(1889)10月1日に成立した。それ以前は名古屋区などとされていた。明治22年(1889)の人口は約15万7000人、面積は13.3km<sup>2</sup>であった(註2と同じウェブサイト)。
- 4) たとえば、明治27年(1894)に名古屋署の管轄内で投宿した外国人の総計は872人に達した(愛知県警察部警務課1897:80)。
- 5) エドモン・コトーが宿泊した「オテル・デュ・プログレ」については、『ジャパン・ディレクトリー』1902年版に掲載されている広告では、「Shinachu Hotel (Hotel du Progres)」と記されている(立脇1997:27:264)ことや、コジェンスキーが「シナチュウと呼ばれるこの旅館の持ち主は…自分の事業をあえて進歩ホテルと呼んだ」(コジェンスキー2001:248-249)と記していることから、支那語の別称として、「オテル・デュ・プログレ」や「進歩ホテル」があったと思われる。
- 6) 表1で挙げた者たち以外にも、濃尾大地震被災地調査のために明治24年(1891)10月29日に来名したバルトンは、地震で半壊した秋琴楼に一泊している(稲場2016:195)。
- 7) たとえば、明治41年(1908)5月15日には竹田宮・同妃が伊勢神宮参拝の途次で一泊、明治41年(1908)8月10日と明治43年(1910)5月8日にはそれぞれ韓国皇太子が一泊している(名古屋市会事務局1961:362-363,380)。
- 8) 開業年は、本店は「文化年間(1804~18)」,支店は「明治22年(1889)」であった(東京人事興信所調査1911:29)。
- 9) 東京人事興信所調査1911:28では「開業明治30年(1897)」となっているが、名古屋市会事務局1961:275では「明治28年(1895)5月」開業とされている。
- 10) アーネスト・サトウとアルバート・ジョージ・シドニィ・ホーズが共編著として明治17年(1884)に刊行した。
- 11) ニコライの来名の主な目的は、信徒の様子をうかがうことや伝道であった。アーノルドの関心は、明治23年(1890)3月28日~4月5日のあいだに愛知県で行われた陸海軍特別大演習や大観兵式を統監した明治天皇にあった。ブースは、集会での演説のために来名した。
- 12) 名古屋城は、明治26年(1893)6月1日に御料地とされて、名古屋離宮と呼ばれるようになった(名古屋市会事務局1961:258)。
- 13) 表2で挙げた者たち以外にも、明治39年(1906)5月12日には「シャム国皇族プリンス・ナコンチャインー殿下」、明治41年(1908)には「ドイツ国枢密顧問官、細菌学者ロベルト・コッポ博士夫妻」、同年9月5日は「ドイツ国枢密顧問官ハルレ大学教授医博カール・フレンケ」が名古屋城を拝観している(名古屋市会事務局1961:345,363-364)。また、イギリス人のヘンリー・エドワード・レイヴァー(?~1926)が明治41年(1908)に名古屋城の写真を撮影した(グローヴァー2017:176,205)。
- 14) ビルマ人ウー・オッタマ僧正(1880~1939)は明治43年(1910)に来名した。大正3年(1914)には『日本国伝記』を刊行した。
- 15) 『広辞苑』では、七宝焼について「銅・青銅・金・銀・磁器などの表面に、金属の酸化物を着色材としたガラス製の釉を埋め、熱して溶着させ種々の模様を表す技法。またその製品。中国で瑛瑯、西洋でエマーユ(エナメル)」



(新村2018:1310)と説明されている。

- 16) 『広辞苑』では、珐瑯について「鉄・アルミニウムなど金属の素地に釉を塗って焼き、ガラス質に変えたもの。装飾品では七宝焼がある」(新村2018:2684)と説明されている。
- 17) タイムズ紙 (*Times*) 39328号(明治43年(1910)7月19日)に掲載された特派員 (special correspondent) による「The City of Nagoya」という記事。
- 18) たとえば、「勤勉で活動的な住民達が七宝や扇子や絹製品をつくるのに忙しい」(コトー 1992:176), 「絹問屋は大丸と十一屋がある」(サトウ 1996:140), 「絹地を作る工場は名古屋の近郊にある」(オウタマ僧正 1974:61), などと記されている。
- 19) コジェンスキーは、主な都市の人口数を、東京:121万7309人、大阪:48万4342人、京都:29万6639人、名古屋:17万3642人、などのように記している (コジェンスキー 2001:248)。
- 20) ただし、名古屋での宿泊場所としては、洋式の場所が好まれていたと推測される。

## 参考文献

### 外国人たちの記録

- アーノルド, サー・E (岡部昌幸 訳) 2004, 『アーノルド ヤポニカ』(新異国叢書第Ⅲ輯8), 雄松堂出版。
- アブデュルレシト・イブラヒム (小松香織・小松久男 訳) 2013, 『ジャボンヤールイブラヒムの明治日本探訪記』, 岩波書店。
- ウェストン, W (長岡祥三 訳) 1987, 『ウェストンの明治見聞記: 知られざる日本を旅して』, 新人物往来社。
- オウタマ僧正, ウー (大阪外国語大学ビルマ語研究室 訳, 大野徹 監修) 1974, 「日本国伝記(4)」, 『鹿児島大学史録』 7, pp.59-68。
- クライトナー, G (小谷裕幸・森田明 訳, 大林太良 監修) 1992, 『東洋紀行』1巻(東洋文庫555), 平凡社。
- クラフト, ウーグ (後藤和雄 編) 1998, 『ボンジュール・ジャボン: フランス青年が活写した1882年』, 朝日新聞社。
- グリフィス (山下英一 訳) 1984, 『明治日本体験記』(東洋文庫430), 平凡社。
- コジェンスキー, ヨゼフ (鈴木文彦 訳) 2001, 『ジャボンスコ: ボヘミア人旅行家が見た1893年の日本』, 朝日新聞社。
- コトー, エドモン (幸田礼雅 訳) 1992, 『ボンジュール・ジャボン: 青い目の見た文明開化』, 新評論。
- サトウ, アーネスト (庄田元男 訳) 1992, 『日本旅行日記』2巻(東洋文庫550), 平凡社。
- サトウ, アーネスト (編著), 庄田元男 (訳) 1996, 『明治日本旅行案内〈中巻〉ルート編I』, 平凡社。
- シドモア, エリザ・R (外崎克久 訳) 2002, 『シドモア日本紀行』, 講談社。
- 中村健之介 (編訳) 2011, 『ニコライの日記: ロシア人宣教師が生きた明治日本』(岩波文庫) 上巻, 岩波書店。
- 萩原延壽 1999, 『外国交際: 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄5』, 朝日新聞社。
- 萩原延壽 2001, 『離日: 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄14』, 朝日新聞社。
- ハワード, エセル (島津久大 訳) 1999, 『明治日本見聞録: 英国家庭教師婦人の回想』, 講談社。
- フェルディナント, フランツ (安藤勉 訳) 2005, 『オーストリア皇太子の日本日記—明治二十六年夏の記録—』, 講談社。
- フィッシャー, アドルフ (金森誠也・安藤勉 訳) 2001, 『明治日本印象記: オーストリア人の見た百年前の日本』, 講談社。
- ベルソール, A (大久保昭男 訳) 1989, 『明治滞在日記』, 新人物往来社。
- ホーム, チャールズ (トニ・ヒューバマン/ソニア・アシュモア/菅靖子編, 菅靖子・門田園子訳, アーサー・L・リバティ夫人写真) 2011, 『チャールズ・ホームの日本旅行記—日本美術愛好家の見た明治』, 彩流社。

## 外国人からみた明治時代の名古屋

- ミットフォード, A.B (長岡祥三 訳) 1986, 『英国貴族の見た明治日本』, 新人物往来社。
- 村田明子 (編訳) 2008, 『フェノロサ夫人の日本日記—世界一周・京都へのハネムーン, 一八九六年—』 (シリーズ・人と文化の探究④), ミネルヴァ書房。
- モース, エドワード・シルヴェスター (石川欣一 訳) 2013, 『日本その日その日』, 講談社。
- モール, オットマール・フォン (金森誠也 訳) 2011, 『ドイツ貴族の明治宮廷記』, 講談社。
- リヒトホーフエン, フェルディナンド・フォン (上村直己 訳) 2013, 『リヒトホーフエン日本滞在記—ドイツ人地理学者の見た幕末明治』, 九州大学出版会。
- Times*, 39328号 (1910年7月19日)。

### 二次文献・ウェブサイト

- 愛知県警察部警務課1897, 『明治廿七年愛知県警察統計表』, 愛知県警察部。
- 浅井廣國1893, 『尾張名所案内』, 風詳堂。
- 稲場紀久雄2016, 『バルトン先生, 明治の日本を駆ける! : 近代化に献身したスコットランド人の物語』, 平凡社。
- 上野隆生2015, 「イタリア人青年の見た日清戦争期の日本: Giovanni De Riseisの*Il giappone moderno*に見る日本イメージ」, 『和光大学現代人間学部紀要』第8号, pp.53-70。
- 内田宗治2018, 『外国人が見た日本: 「誤解」と「再発見」の観光150年史』 (中公新書2511), 中央公論新社。
- グローヴァー, フィリップ (三井 圭司 編) 2017, 『レンズが撮らえたオックスフォード大学所蔵幕末明治の日本』, 山川出版社。
- The Nagoya Hotel (T. TAKADA)1900, *Hand Book of Information about Nagoya and Vicinity for Tourist, the Nagoya Hotel*.
- 新修名古屋市史編集委員会 (編) 2000, 『新修名古屋市史』第五巻, 名古屋市。
- 立脇和夫 (監修) 1997, 『ジャパン・ディレクトリー: 幕末明治在日外国人・機関名鑑』第25巻 (1901年下) ~ 第46巻 (1912年上), ゆまに書房。
- 東京人事興信所調査1911, 『旅館要録: 四四年後期 増補改訂七版』。
- 名古屋開府三百年記念会 (編) 1910, 『名古屋案内』, 名古屋開府三百年記念会。
- 新村出 (編) 2018, 『広辞苑 第七版』, 岩波書店。
- 中野明2013, 『グローブロッター—世界漫遊家が歩いた明治ニッポン』, 朝日新聞出版。
- 名古屋市会事務局 (編) 1961, 『総合名古屋市年表 (明治編)』, 名古屋市会事務局。
- 山本軍平 (編) 1907, 『日本に於けるブース大将』, 救世軍日本本營。
- 名古屋市公式ウェブサイト (<http://www.city.nagoya.jp/>)